《修士論文要旨》

# 古墳時代におけるガラス小玉の流通形態

－近畿・北陸における時代的、地域的特徴－

高　橋　美　鈴*

## はじめに

ガラス小玉は、弥生時代日本にもたらされ、古墳時代には国内全域に流通した。しかし、現在ガラスの流通の研究では主にガラスがどこから来たのかという原材料からの製作地の研究が行なわれていることが多く、本稿では、自然科学的な分析をもとにどのような地域、遺跡でどのようなガラス小玉が埋葬されていたかという地域差、時期差から日本国内での流通について考察を行う。

## 1. 研究目的

本稿では、はじめに古墳時代の遺跡から出土したガラス小玉の分析値や出土遺跡の相関性から、ガラスの時代的変容や地域的特徴を見出しガラス小玉の流通を考えることを目的とする。

## 2. 成分分析によるガラスの変容

本稿では、エネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて古墳から出土したガラス小玉の分析を行った。分析を行った遺跡は、福井県花野谷１号墳、浄土寺7号墳、天神山13号墳、大阪府シシヨツカ古墳、峯ヶ塚古墳、百舌鳥大塚山古墳、滋賀県円山古墳、奈良県吉備塚古墳の８遺跡である。分析はすべて非破壊分析であり、表面は未研磨の状態である。

## 3. ガラス出土遺跡からみる変容

ガラス出土遺跡をまとめ、どのような地域でどのようなガラス小玉が出土しているのかをまとめるとともに、共伴遺物やガラスの色調の変化の時期からガラス小玉が出土する遺跡を考察する。

## 4. 考　　察

これらの結果より、４世紀では、福井県花野谷１号墳や浄土寺７号墳のようにカリガラスが流通すると考える。また、色調は濃紺色か淡青色のどちらかに集中し、双方が埋葬されている遺跡では

平成23年度　*文学研究科文化財史料学専攻

濃紺色は比較的大きな丸玉、淡青色は小さめな小玉と分けられて使用されていたと考えられる。

５世紀では大阪府風吹山古墳のように特殊なソーダ石灰ガラスが日本のもたらされるとともに、大坂府百舌鳥大塚山古墳のように出土ガラスの材質の比重がカリガラスよりも高アルミナソーダ石灰ガラスが多くなる。そのほか大阪府高井田山古墳や奈良県新沢千塚126号墳、福井県泰遠寺山古墳、滋賀県大塚山古墳のように、トンボ玉、金層ガラスといった今まで国内で流通していなかった特殊なガラス小玉も見られるようになり、今までに比べ国内に多様なガラスが流通するようになる。

また、この頃から４世紀では一部の古墳に埋葬されるだけだった棗玉や切子玉、算盤玉がみられるようになり、後半には耳環との共伴も多くなり、ガラスを含めた装飾品にバラエティーがうまれた。また、この時代以降、奈良県、大阪府ではガラス小玉鋳型が出土するなどガラス小玉の生産遺跡と思われる遺跡も見つかっている。奈良県南郷遺跡からはガラス以外に鉄滓など製鉄遺物も出土していることから、鋳型を用いてのガラス生産が製鉄と繋がりがあった可能性が示唆される。弥生時代ではあるが、奈良県唐古・鍵遺跡ではガラスとともに青銅製品の製作遺物が共に出土している例も確認されている。しかし、福井県林・藤堂遺跡は玉作り遺跡でのガラスの出土であることから、ガラスの生産遺跡には玉作りに付随するものと金属生産に付随するものとがあることを考えたい。

６世紀になると、爆発的にガラス小玉出土遺跡が多くなる傾向を見せる。また、１遺跡で見つかるガラス小玉の総数が多くなり、多色のガラスが出土する例も多くなる。特に、福井県十善の森古墳では4700点以上ものガラス小玉が埋葬されていたり、滋賀県円山古墳でも3000点以上ものガラス小玉が出土していたりしている。それに伴い、共伴遺物に勾玉や管玉、切子玉、算盤玉、耳環といった他の装飾品が用いられることも多くなり、どの遺跡にも平均して装飾品にも多様性がみられる。

７世紀には飛鳥池遺跡のように日本国内においてガラス原料からのガラス生産が始まり、それに伴い鉛ガラスの出土がみられるようになるが、分析の報告によれば高松塚古墳ではガラスにはソーダ石灰ガラスが使用されていることから鉛ガラスの流通に一定の規定があった可能性も考えられる。

## おわりに

以上のことから、弥生時代より継続的に流通、使用されていたガラス小玉であるが、時代的変化によりその材質、装飾性は変化が見受けられ、地域による差異も確認された。

## 謝　辞

本稿の執筆にあたり、福井市教育委員会、野州市教育委員会、堺市教育委員会、大阪府教育委員会、羽曳野市教育委員会、奈良教育大学には資料の提供をしていただきましたことに深謝いたします。